

2018年9月6日

札幌市医師会
札幌心臓血管クリニック

道井 洋吏

いつもより強い揺れだなあと目が覚め、地響きのような振動と結構長く続く揺れに流石に不安になり、ベッドから起き出した。東日本大震災の時も東京に居て被災したが、その時よりも強かったような気がする。

窓の外は深い闇で、停電なのは分かっていたが、広域停電で世の中が真っ暗というのは異様な不気味さを含んでいた。

病院に連絡を入れると、やはり停電とのこと。大きく破損した物もなく、人工呼吸器なども非常電源が効いて問題なく作動しているようで、とりあえずはアンビューバッグ押しに急行する必要もないと安心し、眠気覚しのコーヒーを一杯淹れて(幸いガスは止まっておらず火は使えた)から、病院に駆けつけた。

札幌南インターから高速を利用するのだが、道中、街灯はもちろん信号も消えており、交差点への侵入は緊張した。ひょっとして、と淡い期待を抱いてインターを潜ると、ETCだけはきちんと作動していて料金は徴収されました(^;)でもそのあと高速が止まったことを思うと感謝しなければ…。

病院に到着すると、既に理事長の藤田 勉は来ていた。あるいはいつものように院内に泊まっていたのかな。ラウンドしてみると一応は通常通りに動いているようで、水も出ていた。それでもまずは水の確保と、不要な灯りを消しての節電を徹底させた。当初は要所要所の電灯は点いていたのだ。

当院のような循環器急性期診療では、精密微量持続点滴ポンプを多用するのだが、院内には104台のシリンジポンプがあり、ICUを中心に常時70台程度稼働している。1時間あたり2mlや3mlの微量点滴を手動で管理できるわけもなく、代替手段のある人工呼吸器より厄介だと気付いた時は背筋が寒くなった。

極力投与薬剤を整理し、待機中のポンプは全て非常電源に接続してフル充電した(震災後には小型の発電機を購入しておいた。今後、充電ものはこれで対応できるだろう)。

停電復旧の見通しもないまま時間は過ぎて行った。非常電源がどのようなシステムになっているのか分からないが、次第に大きな非常灯が消灯していき、豆電球のような電灯のみが灯っているような状況になってきていた。とにかく非常電源がストップすると多くの人命が危険に晒される。ディーゼル発

電機の燃料は保ってあと半日という話もあり、早急に燃料を確保することにした。

まだ夜も明けきらない時間であったが、患者さんでもある石油配送業者社長に電話するとすぐに対応してくれ、150リットルの軽油が確保できた。が、それだけの専用容器があるわけもなく、キンダリー透析液のポリタンクに詰めて運んだのだが、これが後で消防署からキツイご指導を受けることになる。皆さんもお気を付けてください。

東区北49条の当院は、翌日14時に電源が復旧した。かなり早い方ではなかったか。インフラの心配はとりあえず解消されたが、物流はなかなか回復しなかった。特に患者さんへの食事提供には数日悩まされた。発災当初は屋上でBBQの炭火を熾し、それで米を炊いておにぎりとして配ったのだが、その後もしばらくは白飯主体の食事となる。といってもほとんどレトルトカレーだったが…。職員は弁当持参である。

翌日には知り合いの青年会議所員の伝手で、JA帯広からジャガイモなどの野菜類をたくさん届けていただいた。が、これらを十分に活用することは叶わなかった。というのも、給食業者がこれらの食材を使ってくれなかったからである。安全上、自前の食材でしか給食しないということであるが、調達の目処が立っているわけでもなく、結局頂いた野菜類は職員に分配することになった。

診療は、電源が復旧してからはすぐに救急は受けることにした。外来診療は翌週月曜日から。ただし処方箋は2週間まで。これらは薬剤の卸し状況のみで随時、期間を伸ばしていった。手術も待てる患者さんはできるだけ一旦退院していただいたが、どうしても退院の叶わない方々を優先的に月曜日から再開していった。

改めて普段自分たちがどれだけ防災意識に欠けていて準備できていなかったか、思い知らされた1週間であった。

いくら想像しても全て想定外のことしか起こらない。開き直るしかないのだが、それでも想像力の一助になればと4ヵ月経った今も鮮明に残っている記憶を書き記してみた。

不思議と自宅での不自由の記憶は残っていないのであった。